

新版

# 神経質の 本態と療法

森田療法を理解する必読の原典

森田正馬



## 序

病気を治すのは、その人が人生を完<sup>まつと</sup>うするためである。生活を抜きにしたら、病気は何の意味ももたない。近来、医学がますます専門に細分化していることと、また一方で通俗医学が誤った宣伝をしているせいで、医者も病人とともに人生というものを忘れ去り、ただひたすら病気ということにばかり執着して、いわゆる「角<sup>つの</sup>を矯<sup>ただ</sup>めて牛<sup>うし</sup>を殺<sup>ころ</sup>し」「人参<sup>にんじん</sup>飲んで首縊<sup>くく</sup>る」ことが多くなつたのは悲しむべきことである。

軽度の心臓弁膜症がある患者がいた。その患者は三、四年前から心悸亢進、眩暈<sup>めまい</sup>その他の症状に悩んで種々の療法に手を出し、家業は捨ててまつたく顧みることがなかつた。私はこれを神経質と診断し、私の特殊療法によつて全快させると、かえつて以前より活発元氣な人間になつた。この患者の前の主治医はこれを見て、まだ心臓弁膜の器質的症状が取れないことに不満を抱いている。この患者からそれまでのいろいろ不快な症状がなくなつて、健全で活動的な人間になつたという点については、それは医療とは別の事柄であるかのように考へている。これ

が当世、若い医学者の研究的態度である。つまり、人を忘れて、病的変化ということにばかり執着しているのである。

病気には、必ず身体的なものと精神的なものと両側面がある。いまの例では、患者が告げる症状はほとんどみんな精神的なものであって、心臓弁膜症やワッセルマン反応が陽性であることはまったく関係がない。この精神的症状の意味を理解するには、心理学や精神病理の知識を必要とする。もしその方面に知識がなければ、それは生理も病理も知らずに診察する医者のようなことになるだろう。

この小著は、私がかつて呉秀三先生の在職二十五年祝賀論文集に提出した論文を修正補充し、さらにわかりやすく書き直したものである。これを単行本として発行することになったのは、およそ病気という病気に広く関係している神経質の精神病理について知識を普及させたいからであり、また、これが学者たちにとつて刺激になり、この方面的研究がますます発展することを希<sup>ねが</sup>うからである。

医療の実際を離れた純医学としてはともかく、今日臨床医が往々にしてもっぱら物質的な面ばかり偏重し、精神的な面は無視して人生の実際を顧みないということはあるのは、私がまことに遺憾に思うところである。

いうまでもなく、私の研究は遺漏<sup>いこう</sup>が多く誤謬も少なくないことではあろうけれど、多くの学

者が私のささやかな志をよしとし、親身になつて教示論究していくことを願つてやまない。

昭和二年十二月二十一日

## 目次

## 序 1

## 第一編 神經質の本態

## 第一 緒言 19

## 第二 私のヒポコンドリーや性基調説

神經質に対する生理的諸説  
神經質に対する心理的諸説

精神的傾向  
ヒポコンドリーとは何か

21 20

28

強迫観念の発生 26  
神經質の症状は主觀的である

### 第三 私の精神交互作用説

精神交互作用とは何か	30	30
私のいう精神性心臓症とは		
潜在意識説について	35	
恐怖感動	39	
不快感情の執着	42	
		32

### 第四 意識と注意に関する私見

精神現象——連合作用	45	
刺激と意識との関係	47	
意識の対目的性	50	
無意注意と有意注意	52	
暗示作用	53	
注意の執着	55	
		45

### 第五 神経質の分類

神経質の三病型	56	56
普通神経質	58	
いわゆる神経衰弱症の否定		59

### 第六 神経質の原因的関係

先天性素質について	65	65
神経質と体型	66	
機会的原因	67	
後天的に起ころる場合	68	

### 第七 神経質の病類位置と精神的変質の分類

神経質に対する従来の見解	70	
神経質に対する私の見解		

第三 一般神經質に対する私の特殊療法

本療法の起源 127  
第一期 臥褥療法 128

神經質療法の着眼点 126  
感情の法則 122  
無所住心 121  
精神の調和作用 119  
注意と意識との関係 115  
注意について 113  
精神の拮抗作用 107  
境遇の選択 110  
主觀といふことの意味 117  
注意について 115  
精神の調和作用 119  
精神の拮抗作用 107  
自然服従 106  
概念の客観的投影 101  
自然と人為、目的と手段 98

第一 緒言	89
第二 本療法の原理	90
思想の矛盾	90
主觀と客觀	92
感情と智識	93
体得と理解	94
信念と判断	95
論理の錯誤	96

変質者とは何か	74
変質者に関する從來の分類	
人格の判定	76
変質者に関する私の分類	80
	75

第二編 神經質の療法

第二期	軽い作業療法	
第三期	重い作業療法	
第四期	複雑な実際生活期	141 135
本療法による治療効果		
治療成績	149	
症状の治癒過程	149	
全治患者の例	150	
器質的慢性病患者の治療		
治療経過	153	
従来諸種療法の弊害	154	
発作性神経症の療法		
発作性神経症とは何か		
心悸亢進発作の例	158	
胃痙攣様発作の例	162	
陣痛様発作の例	164	
強迫観念症の療法		
強迫観念の性質	167	
強迫観念療法の着眼点	169	
恐怖突入	171	
窃盗恐怖患者の治療例	173	
私の方法による治療経過	175	
説得療法	179	
説得療法とは何か	180 179	
論理的説得の弊害		
精神の執着	183	
自我中心的独斷		
自然に帰れ	187	

執着は偏見	188
精神の流転	189
恐怖に対する態度	190
宗教的および哲学的説得	190

## 第八

## 神経質療法の治験から得る応用方面

一般疾病との関係	193
病覚について	194
宗教と人生観	196
迷信との関係	197
教育および衛生との関係	198

\*

## 主要な参考文籍

199

193

## 附録

第一 私の神経質療法に成功するまで	203
第二 催眠術治療の価値	232
第三 臨場苦悶——臨床講義	269